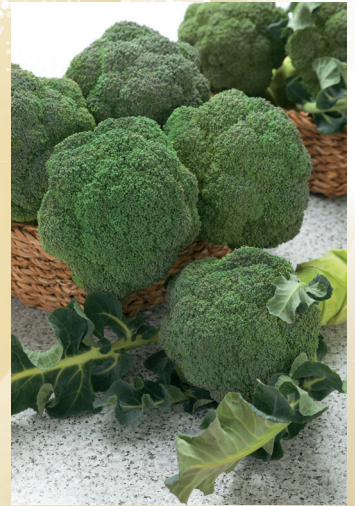




ブロッコリーは重要な野菜として 指定野菜に格上げされました



京都府立大学名誉教授 農学博士
ふじめ ゆきひろ
藤目 幸擴

日本にブロッコリーが入ってきた黎明期に花野菜の研究をはじめ、1982年に「カリフラワーとブロッコリーの花蕾形成並びに発育の温度条件に関する研究」で農学博士の学位を取得された藤目幸擴先生から、ご寄稿いただきましたので一部抜粋してご紹介いたします(編集部)。

ブロッコリーが「特定野菜」から「指定野菜」の15番目に昇格しました。新規追加は50年ぶりだそうです。その研究と普及に携わった一人として、隔世の感があります。京都大学大学院農学研究科を1969年に修了して助手になったところ、大阪の高槻市にあった京大の高槻農場において10a単位でカリフラワーやブロッコリーを栽培していて、その生態に興味をもちました。当時はまだ花椰菜と緑花椰菜という名前でした。今までの野菜と食べる部位の形も異なり、栽培方法もよく分かっていませんでした。その食べる部位である花蕾のできる条件を調べながら、収穫したカリフラワーやブロッコリーを近くの人にあげようとしても、食べ方を知らないのだからと断られたものでした。

そのような野菜であったブロッコリーは、かつて9万tもあった輸入量は、今では国内生産量のわずか1.2%の約2,000tと減少しました。ありがたいことに今ではブロッコリーはほぼ全県で生産されるようになり、国内需要はほとんど国内生産で賄われています。出向先だった香川大学勤務時、講演をして回った香川県は、今では国内生産第4位になっています。1986年に私は香川大学農学部で教授になり、1988年瀬戸大橋の開通で香川県が本土と結ばれブロッコリーの出荷は一層促進されました。この度の指定野菜昇格のニュースを見て、私とブロッコリーの関係を知っているかつての専攻生諸君や友人たちからも、「よかったね」と声もいただいたので、今少しブロッコリーのあまり知られていないお話をさせていただきます。

花序数と花芽数

ブロッコリーの消費が1980年代から伸びた理由の一つが何度も分枝を繰り返しながらその肥厚した先端に花芽を増加させていること、花芽に充実した種子を作るため栄養分を蓄えていることです。栄養価の高い花芽が7万個以上もあるため、ブロッコリーの花蕾はおいしくてよく摂取されているのです。カリフラワーの花芽数を聞かれることがありますが、カリフラワーでは花芽は無限花

序と言って、花芽は初期の花芽原基の段階で発育を停止してその数だけが増え続けていて、肉眼では数えきれません。解剖顕微鏡下で花芽原基の塊に10~20の花芽があり、単純計算では30万~60万となりますが、少なくとも花芽原基は約6万~9万個あると考えられます。

栽培面積の推移

私も栽培の普及に役立つよう農業関係の雑誌にも解説記事を書いてきました。そうしたこともあってか、2000年代から急速に栽培面積と収穫量は増加してきました。農林水産省の統計によると2021年のブロッコリーの栽培面積は約1万6900ha、収穫量は約17万1600tで、出荷量は約15万5500tとなっています。

ブロッコリーは当初、海外からかなり輸入されていて最大時には9万tも輸入されていました。しかし2022年の輸入量は約2129tで、輸入額は約6億3057万円です。輸入量は前年と比べると3670t(約63%)減少していて、今では国内生産量のわずか1.2%の約2129tへと減少しています(財務省貿易統計)。

国内の生産地ですがブロッコリーの花蕾ができるには低温に遭遇する必要があるため、夏が冷涼な北海道、あるいは春に温暖な埼玉県、愛知県、香川県、徳島県が主要生産県となっています。

指定野菜とは

指定野菜にはキャベツ、キュウリ、サトイモ、ダイコン、タマネギ、トマト、ナス、ニンジン、ネギ、ハクサイ、ジャガイモ、ピーマン、ホウレンソウ、レタスの14品目が指定されています。指定野菜は野菜全体の作付面積の約7割、出荷量の約8割、購入量の約7割を占めており、価格が安くなった場合に、国が農家に補填する制度があります。あまり知られていませんが、冬でも夏野菜がスーパーに安定的に供給されているのは、野菜生産出荷安定法があるおかげで、ブロッコリーも同制度に指定されることにより周年栽培されていくことが予想されます。